

チンパンジーの母子関係 - 子供が病気の時の母親のケア行動の観察 -

板倉 昭二 Shoji Itakura, Ph. D.

大分県立看護科学大学 人間科学講座 人間関係学 Oita University of Nursing and Health Sciences

1999年12月6日投稿, 2000年4月3日受理

キーワード

類人猿, チンパンジー, 母子間相互交渉, ケア行動

Keywords

ape, chimpanzee, mother-infant interaction, care behavior

一般に、ヒトの子どもは、病気になったときには、その親によって手厚い介護を受ける。親は子どもを注意深く観察し、定常状態との違いを見つけ出し、健康であるか否かを判定し、適切な処置を施す。こうしたことは人間に特有な行動であろうか。もちろん自然界でも親は子どもを保護し、育てることを常とするが、それはヒトと同様に高次な認識判断によるケア行動なのだろうか。本稿ではチンパンジーを対象として子どもが病気になったときの母子関係を、主に母親のケア行動という視点から事例観察をおこなったので報告する。

その前に、まずチンパンジーについて一般的な説明をしておく。チンパンジーは霊長類オランウータン科に属し、オランウータン、ボノボ、ゴリラとともに大型類人猿と呼ばれる。霊長類の中では進化的に最もヒトに近縁な種のひとつである。ちなみにヒトは霊長類ヒト科に位置付けられる。チンパンジーはアフリカ大陸の赤道周辺に帯状に分布している。野生での平均寿命はおよそ45年ほどであるが、飼育下では59歳という長寿記録も報告されている。数多くの野生チンパンジーの観察や実験室での実験的研究から極めて高次の認知能力を持っていることが示されている。例えば、堅い木の実を石で割ったり、小枝を折り取ってアリ釣りをしたり、葉っぱをスポンジ代わりにして溜った水を飲んだり、といったいわゆる道具使用行動も観察されている。我が国の京都大学霊長類研究所でもチンパンジーの言語プロジェクトが展開され、人工図形言語を教えることにより、彼らの多様な認知世界を報告してきた(Itakura & Matsuzawa, 1993 参照)。

さて、では観察報告に戻ろう。対象となったのは、熊本県宇土郡三角町にある三和化学研究所熊本霊長類

パークに飼育されているチンパンジー母子で、母親は観察当時18歳、子どもは5歳のオスであった。この母子チンパンジーは、基本的には放飼場で他の仲間と一っしょに飼育され、夜は寝室でペア飼育される。観察を始めた頃、子どもチンパンジーは、風邪をひいておりかなり頻繁に咳をしていた。観察は、チンパンジーのグループが朝寝室から放飼場へ移動して、餌を食べ終えてからの2時間おこなわれ、同じ時間帯の観察が5セッション継続された。

観察対象となった行動は、母親からのグルーミング(一般的には毛づくろいと呼ばれる)、移動する時のホールディング(母親が子どもを抱きかかえての移動)そして子どもの咳であった。すなわち、ここでは、子ども咳の回数を独立変数、それに呼応して出現するグルーミングやホールディングの回数を従属変数として想定したのである。便宜上、子どもの咳の回数は風邪の症状の重さと考えた。つまり、咳の回数の変動と母親のケア行動(グルーミングやホールディング)との関数関係を同定しようと試みたわけである。

結果を図1に示した。観察開始セッションから終了セッションまでの反応を、それぞれの反応の最大生起数に対する割合で示した。例えば、咳の回数の場合、最も多いのが3セッション目に観察された20回であるからそれを1として、その他のセッションでの回数を、1に対する割り合いで示した。具体的には、2セッション目の咳の回数は18回であるから、この場合は90%となる。こうして、それぞれの反応数の推移を比較可能な形式にしたのである。図1のグラフから言えることは、いずれの反応も3セッション目がピークであり、一致していた。また、セッションの推移を見ると、子どもの咳の回数と母親からのグルーミング

やホールディングの回数の推移はきれいに一致している。つまり、子どもの症状の重さに応じて母親のケア行動が変化したことがわかる。最終セッションでは、子どもは完全に回復し、咳はまったくなくなった。それとともに、母親のケア行動も消失した。ただし、グルーミングは、母子である以上、まったく見られないわけではなく、ごく稀にはあるが、その後の観察により出現する

ことがわかっている。セッション前の日常の観察から、この母子は、普段は放飼場では近接頻度はそれほど高くなく、距離もかなり大きいことがわかっている。子どもが5歳でしかもオスということから、こうしたことは不思議ではない。むしろ、常時接近していることの方が通常の事態では考えられないことである。したがって、こうした接近行動やケア行動は、子どもの病気によるものと考えられる。

本稿をまとめると以下ようになる。チンパンジーの母親は子どもが病気的时候は特別なケア行動(レパトリーにはある行動だがその頻度が増える)を示し、それは、子どもの症状の重さに呼応するように変化する。これはたかだか1事例の観察であるが、たとえ1事例の観察でも、こうした行動をチンパンジーが示すことは大変興味深いと思われる。

参考文献

Itakura, S. & Matsuzawa, T. (1993) Acquisition of personal pronouns by a chimpanzee. In H. L. Roitblat, L. M. Herman, & P. E. Nachtigall (Eds.), Language and communication. Comparative Perspectives (pp. 347-363). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates

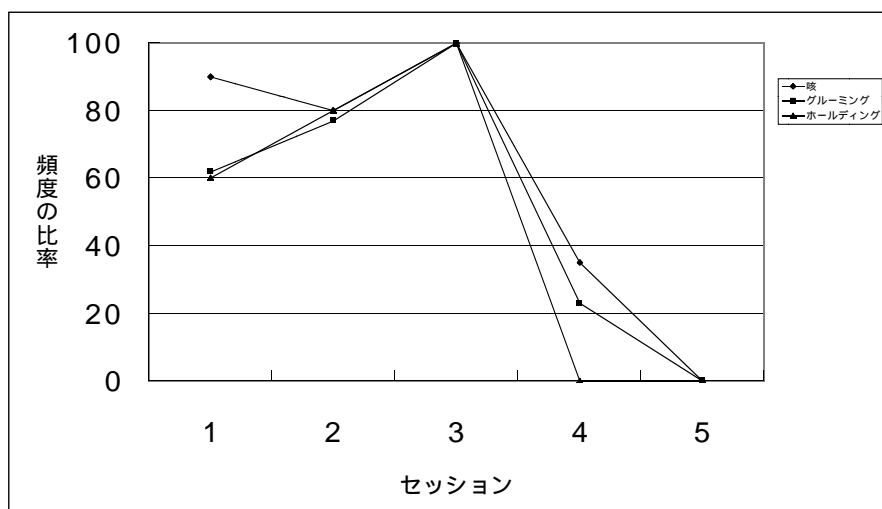


図1 咳の回数と母親のケア行動(グルーミングとホールディング)との関係

著者連絡先

〒 870-1201
 大分県野津原町廻栖野 2944-9
 大分県立看護科学大学 人間関係学研究室
 板倉 昭二
 itakura@oita-nhs.ac.jp